

郷土博物館・文学館だより

特別展

「住まいからみた近・現代の渋谷」

現在当館では、「住まいからみた近・現代の渋谷」を開催しています。(12月24日まで)

今回の特別展は、明治期から昭和期にかけての「渋谷の住まい」についての展示です。

渋谷区周辺は江戸期まで都市近郊の農村としての性格が強くありましたが、明治から昭和初めにかけて、郊外住宅地として急速に発展してきました。明治期には、南平台に外交官内田定槌(さだつち)邸、原宿に旧大名家の池田家別邸などが建てられ、大正・昭和初期には、新たに誕生したサラリーマン層の住まいとして、和洋折衷の「文化住宅」や洋風色の強い「あめりか屋」住宅が建設され、さらに同潤会青山・代官山ア



同潤会青山アパートの扉と階段柱

パートなども建設されました。太平洋戦争後は、代々木公園とその周辺一帯の広大な土地に、進駐軍兵士とその家族の住まいである、「ワシントンハイツ」が作られました。また、戦後第1回目のマンションブームの発端といわれる原宿の「コープオリンピア」など、集合住宅を中心に、時代を代表する住まいが次々に建てられました。

本展では、建築図面や写真、当時の建物の建築部材などを通して、明治以降に建設された、渋谷の住まいの歴史を紹介するほか、戦前の住まいである服部邸洋室や同潤会青山アパートの階段と玄関扉などを一部再現しています。



特別展示室の展示の様子

江戸時代にあった渋谷の「村」

現在の渋谷区は、昭和 7 年（1932）に渋谷町・千駄ヶ谷町・代々幡町が合併して成立しました。それぞれの町は、明治時代の終わりから大正時代にかけて、渋谷村・千駄ヶ谷村・代々幡村が町になったものです。では、江戸時代の渋谷には、どのような村があったのでしょうか。

江戸時代にも、渋谷村という村がありました。その当時は、「上渋谷村」などのように、上・中・下に分かれていました。ただし、江戸時代も最初の頃は、ただの「渋谷村」だったようで、延宝年間（1673～81）初頭に3つに分かれたと考えられています。そして、元禄 10 年（1697）になると、さらに村が分かれます。今度は上・中・下渋谷村から、それぞれ上・中・下豊沢村が分村します。豊沢村全体の範囲は、おおよそ、現在の渋谷区の南西部に相当しますが、豊沢村は明治 12 年（中豊沢村は 7 年）に、再び各渋谷村と合併し、消滅してしまいます。

千駄ヶ谷村の名前も江戸時代には見えますが、当時の千駄ヶ谷村は明治の頃の範囲よりもずっと狭いものでした。というのも、江戸時代、その範囲内には、千駄ヶ谷村のほかに、原宿村・穩田村という村があったからです。また、武家屋敷が占める割合も高かったため、おおよそ、渋谷川上流や、その支流に沿った農地などに村が広がるだけでした。

原宿村は明治 13 年に千駄ヶ谷村の一部となりますが、それ以後も、「原宿」の地名は、小字や町名などで使われてきました。しかし、現在では町名としては存在しません。穩田村は現在の表参道付近に広がり、その様子は葛飾北斎の

描いた錦絵「隱（穩）田の水車」にも描かれています。

では、代々幡村は江戸時代にもあったのでしょうか。江戸時代や明治の前半ごろまでの古文書などをみると、代々木村・幡ヶ谷村などの村名を見つけることができます。ここからわかるように、代々幡村とは、代々木村と幡ヶ谷村が明治 22 年に合併してできた村です。両村はおおよそ玉川上水を境界としていますが、江戸時代から両村の結びつきは強く、明治 15 年には両村によって現在の幡代小学校が設立されています。

江戸時代からの「村」は、渋谷からはなくなりましたが、その面影は今でもあちらこちらに残っています。



「穩田」の名前が見える穩田橋跡の橋銘板



中原中也と大岡昇平 (前編)

今年、詩人・中原中也の生誕 100 年にあたります。明治 40 年 (1907)、山口県に生まれた中也は、昭和 9 年 (1934)、近代人の孤独な魂を歌った処女詩集『山羊の歌』を刊行しますが、世間的には無名に近い詩人として、昭和 12 年に没しました。

30 年の短い生涯は、「いつも人生を裏返して表現することばかり考えていた」「人が右へ行こうといえば、必ず左に行く」という中也に対する文学仲間の言葉に象徴されるように、幸福であったとは言い難いものでした。

しかし、現在では、中也の作品は教科書にも掲載され、多くの愛読者がいます。代表作「サーカス」の「ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん」という独特のリフレインを覚えている人も多いことでしょう。中也が詩人としての地位を確立したのは、もちろん作品の魅力によるものですが、一方で、旧友・大岡昇平の努力を無視することはできません。大岡は、敗戦の翌年から、中也の詩を擁護する文章を書き続けました。

二人の出会いの機会を作ったのは、大正 14 年に 24 歳で夭折した詩人の富永太郎であったといえるでしょう。当時、大岡と富永の弟、次郎とは成城第二中学四年の同級生で、富永の家は代々木富ヶ谷にあり、大岡の家もまた渋谷の栄通沿い (現在の松濤) にあったことから、二人は親しく交流していました。大岡は富永の遺した詩集によって、ランボーを知り、小林秀雄や中也を知るに至ります。この年は、中也の恋

人であった長谷川泰子が、小林のもとへ去るといふ有名な事件が起きた年でもありました。中也の苦悩は想像を絶するものだったでしょう。皮肉にも、その苦悩は中也の作品に磨きをかけることになります。昭和 4 年、中也は、阿部六郎・内海誓一郎・大岡昇平・河上徹太郎・富永次郎らとともに、文芸雑誌『白痴群』を刊行します。

同年 6 月、富ヶ谷に住んでいた中也は、酔って下宿に帰る途中、大向小学校の裏で大岡と別れた後、沿道の町会議員の家の軒灯に石をぶつけ、渋谷警察署に 15 日間留置されてしまいます。中也は酔席で罵ることも多く、大岡とも次第に仲違いするようになっていきます。大岡はこんな文章を残しています。「いつのまにか中原と私は、電車中の人の顔が、こっちへ向くくらいの口論になっていた。その頃の私の家があった渋谷へ着いて、ドアが開いても、私はこのまま乗り続けて結着をつけたいくらいな気持ちになっていたが、ドアが閉まる寸前、外へ飛び出した。中原は、代々木八幡の村井さんの下宿の近所に住んでいた頃だった。」(「詩碑が建つ」)



昭和 3 年 宮益坂下から国電カード道玄坂を望む

収蔵資料紹介



ませいせきら 磨製石斧 (縄文時代)

最大長 7. 65cm (上部欠損)
最大幅 5. 26cm
最大厚 3. 02cm

石を材料にした道具を一般に、石器と呼んでいます。石器はその製作工程の違いから、石を打ち欠いたり押しはくだけで製作する打製石器と、打ち欠いた石を材料にしてさらに磨いて作る磨製石器などがあります。また石器は、時代や用途によってさまざまな種類に分けることができます。

上記写真は、いろいろな石器のなかでも、磨製石斧と呼ばれているものです。恵比寿にある豊沢貝塚遺跡から出土しました。

石斧は、主に木製の柄につけて使用していました。柄に装着する違いによって、縦斧と横斧の二種類があったようです。縦斧は、ちょうと鉞(まさかり)のように刃と柄がほぼ平行になるように装着しました。横斧は、鎌(く

わ)のように刃と柄が直行するものをいいます。縦斧と横斧はどのような場合に使用したかという点、縦斧が木を切り倒したりする場合に使用し、横斧は切り倒した木を加工する時に使用したようです。

さらに木を切り倒す時によく使われた石斧は、刃が木に入り易い磨製のもので使用されていたと考えられています。打製ですと、木に刃が食い込んでしまい、なかなか抜けないからです。

この石斧は、閃緑(せんりよく)岩という硬い石を加工して作られました。残念なことに、柄に装着する部分が欠損しています。また刃の部分も剥離(はくり)しているのので、おそらく使用中、何か硬い部分にあたり壊れてしまったのでしょう。

【今後の展示予定】

特別展「住いからみた近・現代の渋谷」

平成19年10月2日(火)～12月24日(月)

*渋谷の明治以降の住宅の歴史を振り返ります。

特別展「賀茂真淵」

平成20年1月22日(火)～3月23日(日)

*賀茂真淵の生涯と彼の研究成果を紹介します。

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 9:00 - 17:00 (入館は 16:30 まで)

休館日 ◆ 月曜日(休日の場合はその直後の平日)・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

※ 10名以上の団体料
※60歳以上の高齢者料あり(別途要)

お問い合わせ ◆ 東京都渋谷区東1丁目1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.6

平成19年12月1日発行